

私たちの主イエス・キリストの御名によって、皆さまに恵みと平和がありますように。

今朝、私たちはヨハネによる福音書のなかでこの時を過ごしています。ヨハネ福音書は 4 番目の福音書、他の三つの福音書とはとても異なっていますから、まずいくつかのことを心に留めておくことがよいでしょう。

第一に、ヨハネは自分が見たこと、聞いたことをいちばん最後に、つまり、これらの出来事が起きてからずっと後になってから書き記した人である、ということなのです。主イエスに祝福していただくために両親に連れて来られた幼な子たちも、この福音書が書かれた時には、ひいおじいさん、ひいおばあさんになっていたことでしょう。もちろん、その子たちがまだ生きていたら、の話ですけれど。

ヨハネは、主イエスがどのような方であるのか、そして主イエスの生涯と死、復活は何を意味していたのか、長いあいだずっと考えていたのです。もしもヨハネが他の福音書のいずれかを読んでいたとしても、それらと自分の福音書を調和させなければならぬとは思っていませんでした。ヨハネには、主イエスの物語はどのように語られるべきかについて、彼なりのセンスがありました。そして、自分なりのやり方で語ってごらんさいと、聖霊から自由をいただいていると思っていたのです。これがヨハネ福音書について心に留めておきたい第二のことです。

ヨハネは、他の福音書記者たちが語らなかつた物語を語っています。主イエスが水をワインに変えたこと、夜遅くにニコデモと、そして井戸の傍らでサマリア人の女性と話したこと、これらは、ヨハネがいなければ誰も聞くことはなかつたでしょう。ヨハネ福音書がなかつたなら、教会で「洗足の儀式」も行われなかつたでしょう。バツハが「ヨハネ受難曲」を書くこともなかつたでしょう。そして、レンブラントが「ラザ復活」を描くことも。ヨハネだけがこの物語を語っているからです。

もしもこの物語をはじめて聞く方がおられるなら、この「ラザロの復活」の物語は、新約聖書の中で最も優しさにあふれ、最も驚きに満ちた物語の一つです。主イエスが病気の友人の命を救うのに遅刻したこと、ラザロの姉妹であるマルタとマリアが泣いているのを見て主イエスも泣き出したこと、主イエスがラザロの墓に入ろうとするのをマルタが止めようとしたこと、それでも主イエスは墓に入って行かれたこと。そしてラザロに呼びかけたこと——「ラザロ、出てきなさい」、その様子が語られています。そしてラザロは、巻かれた布を吹き流しのように引きずりながら出てきたのです。それは、今もそうであるように、当時も信じがたいことでした。これが、福音書について心に留めておきたい第三のことです。信じることはヨハネにとって、途方もなく大きなことなのです。

もしも皆さんの中に数値が気になる人があれば、数字上でも突出しています。ヨハネは「信じる」という

動詞を、他の福音書記者と比べると 10 倍、そしてパウロの 2 倍も多く使っています。主イエスの口から、次のような言葉が次々に出てきます。「あなたは信じるか?」「なぜ信じないのか?」「神を信じ、またわたしをも信じなさい」「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」

ヨハネが記した主イエスは、他の福音書にある「幸いを告げる言葉」「マタイ福音書第 5 章」に、もう一つの「幸い」を付け加えることさえしました。主イエスは、ご自分が死者から戻ってこられたことを信じるのに困難を覚えていた弟子、トマスにこう問いました。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」

その言葉はまっすぐ私たちに向けられた言葉です。ヨハネは福音書をずいぶんあとに記しましたから、自分が書くことを見たことがない人たちが多くなっていくことをわきまえていたのです。「信じる」ことは、その人たちにとっても、途方もなく大きなこととなりつつあったのです。今、私たちがそうであるように。

皆さんがおられるところがどうであるかは知りませんが、私が住んでいるところでは、あなたがキリスト者であると誰かが知ったとき、その人たちが最初に知りたがるのは、あなたが何を信じているかということ。あなたは処女懐胎を信じているのですか? 肉体の復活を信じているのですか? イエスが神の独り子であると信じているのですか? 聖書の言葉すべてが本当のことだと信じているのですか?

ちょうど先週のこと、私は著書のサイン会を行いました。そこにいたある女性は、列の最後尾にいて、後ろへ、後ろへと並び直していました。自分の会話を他の人に聞かれたくなかったのでしょう。ついに彼女の春が来ると、テール越しに本を差し出し、身をかがめ、ささやくように私にこう言いました。「で、あなたはイエスについて何を信じているの?」「笑い」そこで、私は答えました。「列の最後の人の質問としては大きすぎる質問ね」。彼女は言いました。「わかってるわ。でもそれが、今、私が取り組んでいる問いなんです。とっても難しいの」

彼女は声をひそめていましたが、そんな必要はなかったのかも \* せん。彼女にはたくさん仲間たちがいるからです。

「ビュー・リサーチ・センター」の調査によると、20 歳以上のアメリカ人の 60% が、あなたの宗教は何ですか、との設問に「いずれにも該当しない」と回答し、その割合は急増しています。かれらが宗教に所属しないのは、宗教の教えに疑念を抱いていることが重大な理由である、と答えており、そのうちの 25% の回答者は、特定の宗教に所属しないことの最大の理由はその点にある、というのです。私は、すでに所属している人たちのなかにも、自分たちの信仰の教えに疑念を抱いている人たちが多くいることを知っています。いったいその数は、実際はどれほどの数に上るだろうかと思うのです。

いったいどれほどの数の人が、「信じる」ことと「所属する」こととは、同じことだとみなしていること

でしょう。いったいどれほどの数の人が、所属したいと思えるほどまでに信じていないことに——あるいは、「信仰条 *Beliefs*」だけに拠って立つ宗教は、具体的ではなく、自分の人生を救ってくれるものではないと、——心悩ませていることでしょうか？

つい最近のこと、大都市周縁部のある活発な教会ですでに事実上の牧師として働いている、若く目を輝かせた女性から話を聞きました。彼女は最近、按手礼受領願いを却下されたのです。それは彼女が、三位一体の本質について、サクラメントの効力について、イエスの神性について、検定委員会を満足させる説ができなかったためでした。

検定委員会に出した公開質問状に——その後私も見せてもらったのですけれど——、彼女は次のように記しました。

「私が思わざるをえなかったのは、『これら一連の問いによって、いったい何が問われているのだろう』ということでした。さらに重要なことは、『この問いは、現実の生活に対して、いったいどのような効果をもたらすのだろう』ということです。信条 *Beliefs* というものは、ある人々には大きな慰めをもたらすものであり、それは特別なこと、美しいこと、極めて善いことでしょう。しかし同時に、キリスト教は、主イエスの働きを具体化するというリアリティをも有するものなのではないでしょうか。そもそも福音というものがまったくもって現実的なものなのですから。その福音に仕える牧師として、信条にはほとんど心を寄せていないということが、どうしてそんなにひどいことなのでしょう。」そして、彼女はこのような締めくくりました。「それでも、私は具体的な行動に対して大いに心を寄せているのです」

このことを考えると、問題はさらに興味深くなっています。というのも、ヨハネ福音書には、「信条 *Beliefs*」という言葉はまったく出てこないのです。「信じる *Believing*」という言葉は出てきます。しかしそれは動詞であって、名詞ではありません。ヨハネ福音書では、「信条」を誰も手にしていないのです。

ヨハネにとって、主イエスを「信じる」とは、イエスが神のもことから来たことに信頼することを意味しています。信じるとは、主イエスを見ること、主イエスを知ること、主イエスのもとに行くこと、主イエスのもとに留まること。信じるとは、主イエスが差し出してくださるならなければならなかったものを受け取ること、主イエスが与えたいと願っておられるものを受け入れること。信じるとは、どんなときでも主イエスとつながっていること、主イエスが行いなさいと言われることを行うことです。「あなたがたがわたしを愛しているのなら、わたしの戒めを守りなさい。わたしの羊を養いなさい。わたしを遣わされた方を受け入れなさい。互いの足を洗い合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」

それでは、愛が動詞であり、名詞ではないとき、愛はいったいどのような姿を示すのでしょうか？

マルタとマリアの家に戻ることになりました。その家で、偉大な愛の行為がおこなわれようとしています。過越祭の一週間前のことであった、とヨハネは語り始めます。二人の姉妹は主イエスのために夕食の席を設けることにしました。最近蘇生したばかりの二人の兄弟ラザロも、一言も発さずにそこにいます。そこにイスカリオテのユダもいるのですから、きっと他の弟子たちもいるはずですが。

その部屋にいる者すべてがユダヤ人であること、このこともヨハネ福音書を読むときには心に留めておきたいことです。ヨハネにとって、ユダヤ人は頭痛の種なのです。ヨハネはユダヤ人についてあまりに意地の悪いことを言うので、彼はイエスがユダヤ人であることを忘れているのかしら、と思わずにはいられません——これはまた別の機会に話すべき課題ですけれど、けれども、ユダヤ人に対するヨハネの意地の悪さが出てくるたびに、それを主イエスの愛の戒めによって打ち消してしまえばよいでしょう。きっとヨハネも、思い出させてくれてありがとう、と喜んでくれるでしょう。

この物語には、皆さんはご自分の鼻も動員しなければなりません。鼻が必要になるからです。一つには、その部屋に漂う生活「life」の香りを嗅ぐために、そしてもう一つには、死の香りを嗅ぐために。この死の香りは、両側からこの食卓に漂ってきます。一週間ほど前、ラザロは墓の中にいました。そしてこれから一週間後、主イエスはご自身の墓の中にいることになります。

その死の香りにはさまれながら、マルタは自分にできる限りのことをしています。その席を取り仕切り、部屋を夕食のにおいで満たすのです。一方、マリアは、その場からそっと抜け出して、何かを捜しに行ったようです。そのことにマルタはもう慣れていました。マリアは気まぐれで、目の前に座っていたかと思えば、時々ふと消えていなくなる、そのような女性なのです。まるで他の人には聞こえない音楽を聴いている、そんな表情がマリアの顔に宿ったらもうどうすることもできない、そのことがマルタにはわかっています。そうなたらただマリアのためになすべきことをして、マリアがあまりに遠くまで流されていくときには引き戻せるように注意しておく、それだけがマルタにできることです。

ようやく夕食がテーブルに並び、食事を始めようと一同は着席します。しかし、食事のにおいはすぐに、あつという間に、香水の香りに呑み込まれていきます。

マリアは食事には関心がありません。彼女が気になっているのは、主イエスの足です。彼女はひざまずき、土でできた瓶の首のあたりを砕きます。空気がその瓶の中身とぶつかり合い、香油の香りが部屋に満ちていきます。鋭い香り、ミントとチョウセンニンジンが混ざり合ったような香りです。一同の動きが止まります。そして、マリアが四つの驚くべきことを次々に行っていくのを目撃することになります。

まず マリアは男性ばかりの部屋で髪をほどこきます。それは敬虔な女性であれば決してしないことです。次に、主イエスの足に香油を注ぎます。これもまた一般的に行われることではありません。王に香油を注ぐ

ということはあるかもしれませんが、それは頭にであって足にはないのです。さらに、マリアは主イエスに触れます。独身女性がラビの足を撫で回すこともふつうありません。友人のあいだでもなされないことです。そして、マリアは自分の髪でその足の香油を拭うのです！ まったく説明不可能なこと、まったくもって奇妙な行為の最後に来る奇妙な締め括りです。その振る舞いに秘められている愛は、あまりにも惜しむことのないもの [lavish] であり、とても見るに堪えません。マリアの行動には、あまりに饒舌な愛情があふれていたために、誰も何を言ってもよいかわからずにいます。

その沈黙に最初に背を向けたのは、ユダでした。ユダはこの事柄について、自分の正しさをはっきりさせようと、倫理的な異議を申し立てます。「なぜこの香油を高く売って、貧しい人々に施さなかったのか」、ユダは問います。ヨハネは、ユダは盗人であって、共有の財布から私腹を肥やしている、と説明します。ユダは貧しい人々のことなど関心がありませんが、主イエスは気にかけているのを知っています。そこで、主イエスが言ってもよさそうなことを口にするのです。もしも主イエスが他人行儀に振る舞わないなら、きっとこう言われるだろう、と。

「なんとという無駄遣い、なんとという贅沢をしたんだ！ マリア、あなたが何を考えているにしても、このような行いは、自分たちのためにすべきではない。もっと不幸な人たちのためにこそするべきだ。これからは、そのことをしっかりおぼえておけ、いいな？」

けれども、主イエスにはご自分で口を開くことができます。その言葉は、ユダに向けられます。

「この人のするままにさせておきなさい。ユダよ、そして、ユダに同意する者があれば誰でも聞きなさい。マリアはわたしの葬りのため、それを取っておいたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」

主イエスは、この方らしくない奇妙なことを言われます。しかし、マリアがああ部屋で砕いて割って明るみに出したのは、あの瓶の中身だけではなかったのです。マリアが砕いて明らかにした真理は、主イエスこそ、なによりも最初に目を注ぐべき方、なによりも最初に語りかけるべき方である、ということなのです。

貧しい人々は、神の庭に根を張る多年草のようなもので、その人たちを心にかける機会はいつでもありません。しかし、主イエスは、この夜、いわば一年草のようなもの、主イエスの時は間もなく尽きようとしているのです。たとえ主イエスが、ここに至るまでそのことを知らなかったとしても——ヨハネ福音書ではそれはありそうにもないことですが——、今、そのことをはっきり知ったのです。

マリアが行ったことを一緒に目撃した今、これはいったい何であったのかについて、私の見解はこうです。これは預言的行為です。

その部屋にいた他の人たちがどのように捉えたとしても、主イエスは、マリアの沈黙の行為を神からのメ

ッセージとして受け止めました。パズルのピースはすべてそこにそろっています。あとは組み合わせられるのを待つだけです。

裏切り者のユダ——マリアの行いに異議を唱えています。香油を入れた容器——ラザロの葬儀で使われ残りであるかもしれません。庭の向こうには空いたばかりの墓——埋葬の香料の残り香が漂い、新しい住人を待ち受けています。死の立ちこめた空気。

最初のうちは、それがいったい誰の死であるのか、いささかなりとも疑問があったかもしれませんが。しかし、マリアの預言的な行為が、真理を明らかにしたのです。マリアは、主イエスの葬りの前に、香油を注いでいたのです。

マリアの振る舞いはまわりの人たちには不思議に映ったかもしれませんが、彼女に先立つ預言者たちに照らすなら、それは不思議ではありませんでした。土の瓶を破壊し、ユダに対する神の裁きを示したエレミヤ。巻物を食べ、自分のうちに神の言葉が蓄えられていることとしるしとしたエゼキエル。3年間裸で歩き回り、それを国々に対する神の託宣としたイザヤ。荒れ野に登場し、獣の毛皮を着て虫を食べ、神の愛する者の到来を告げ知らせる洗礼者ヨハネ。それが、預言者たちがしたことであり、預言者たちがすることです。預言者たちは、まだ誰も見ることでできない真理を行動で示してみせるのです。それを見た者たちは、正気を失っているかと片づけてしまうか、または神からの困惑をもたらす知らせを前にして沈殿するか、そのいずれかです。

マリアが純粹なナルドの香油を手にして主イエスに近づいた時、これから起こる出来事は、いずれの方向にも進む可能性がありました。その一瞬、そのどちらにも向かう可能性があったのです。マリアには、主イエスの頭に香油を注ぐこともできませんでした。そうすれば、すべての者たちは、主イエスを自分たちの新しい王と認めたことでしょう。しかし、そうはしませんでした。マリアは、その代わりに、主イエスの足に香油を注ぎました。それが意味したことは、ただ一つ。足に香油を注がれたのは、死者だけでした。そして、主イエスはそれをご存知だったのです。「彼女のするままにさせておきなさい」、主イエスは言われました。

「彼女のするままにさせておきなさい。彼女がなすべきことをさせなさい」

やっかいなことに、この箇所について記された注解書を読むと、いったいどれほどのインクを無駄遣いしながら、マリアは真の信仰者だったかどうか、ということが論じられていることでしょう。「マリアは自分が何をしているのか、本当に理解しているのか?」「マリアはイエスが誰であるか、イエスの目的が何なのかであるかを、正しく理解しているか?」「もしもマリアが正しく理解しているなら、なぜはつきりそれを「言わないのか?」「マリアは、ベトロやトマスのように、なぜ自分の信仰を明快に告白しないのだろうか?」「マリアの信仰告白の言葉は、どこに見出せるのか?」

それが「どこに」あるのか、私が皆さまにお伝えしましょう。それは、マリアの髪にあります。マリアの手にあります。マリアのかがかんだ体にあります。マリアの鼻にあるのです。

ここにあるのは、音声をミュートした福音です。部屋にいる他の人たちはべちゃくちやしゃべっています。しかし、マリアは口を閉じたままです。彼女の「信じる [believing]」という行為は、彼女の肉体にあり、言葉の中にはないのです。それは、彼女が何をするか、であり、彼女が何を言うか、ではありません。そこにある愛は、あまりにも惜しむところのないもの [lavish] であり、見るに堪えられないほどのものです。そこに愛が雄弁に語られているからこそ、主イエスはおしゃべりな人たちに告げます。「どうか、黙っていてくれ」

この場面を、ずいぶん後になって書き記したヨハネは、これを他の物語と関係づけました。英語ではそのことを聴き取ることはできませんが、マリアが自分の髪で行ったことを言い表す動詞を選ぶ際、ヨハネは「ぬぐう」という動詞を選んだのです。そして、時が来て、死の前夜、主イエスが弟子たちの足にしたことを言い表す動詞を選ぶ際にも、ヨハネは同じ動詞を選ぶことになりました。「イエスはぬぐった」と記したのです。

「わたしのしていることは、今あなたにはわかるまい」。主イエスは弟子たちに、その夜、言われました。「しかし後で、わかるようになる」

結局弟子たちはわかるようになったのか、私にはわかりません。私たちがわかるようになるのか、それ私にはわかりません。いえ、完全にわかるようになることはないでしょう。それゆえ、私は、主イエスの最後の言葉のひとつである、先ほどの言葉が語られた語順にどうしてもこだわりたくなるのです。お気づきになったでしょうか？

「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、理解できるようになる」

行うことが最初に来ています。理解することはあとに来るのです。愛が最初に来ています。信条 [belief] はそれについてきます。

もしもあなたが、今なお、理解できるようになることを待っているのなら、もしもあなたが、自分が何を信じているのかよくわからないでいるのなら、心を強くしてください。あなたにはたくさん仲間がいます。そして、ご存じでしょうか？ それでも、あなたがすることはたくさんあるのです。

「わたしの羊を飼いなさい」

「互いの足を洗い合いなさい」

「わたしが遣わす人を受け入れなさい」

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」

マリアはそのメッセージを受け止めました。そして、マリアはひと言も発するなく、そのメッセージを行為に移したのです。その一方、マリアを見た人たちの中には、マリアは気が変になった、浪費家だ、なんていう無駄遣いだ、と思う人もいたのです。

しかし、足を拭うマリアは理解していません。神が心に留めていてくださるところであれば、ナルドの香油を、愛を、命を注ぎ出して使い果たしてしまうことを恐れる必要のないことを。

なぜなら、神が心に留めてくださるところであればそこにはいつでも、私たちが願うよりも、私たちが思い描くよりも、ずっと多くの贈りものが与えられるからです。惜しむところのない [lavish] 惜しむところのない [lavish]、主のもとからアーメン。

<https://youtu.be/FQKVQUJs4B6g>

